

多義語の意味拡張についての認知的考察

— live with～の場合を基に —

松 中 完 二

0. はじめに

本論文は、多義語の意味の捉え方についての一試論である。ここでは英語の成句 live with～を対象に、その概念部分と多義的意味認識の原理について、認知意味論の視点から解明する。

認知意味論において、語の多義構造が語の内部構造よりも、むしろ我々の心内における認識作用にあることに重点が置かれることは、これまでも繰り返し述べてきたが、語の中心的な意味認識をプロトタイプとして設定し、中心から周辺への意味の派生、拡張現象を捉えるに当っては、田中茂範（1990：97-99）が指摘するように、その派生、拡張といった意味の有契性を支える原理の解明も必要となる¹⁾。

また、プロトタイプの認識は、認知的視点に立った多くの言語研究者が述べるように、心的なイメージによる意味の把握によるものであり、そこからの意味の派生、拡張の関係と原理をいかにして説明付けるかという点に問題が集約される。

本論文は、こうしたプロトタイプ理論を英語の成句、live with～に当てはめ、その多義的意味認識の構造と原理を明確化しようと試みるものである。

1. 研究目標

live with～は「～と一緒に生活する」という、対象人物との同居を表す意味認識が顕著であり、それはまた live with～の本義的意味認識として想定出来よう。その一方で、人物以外に様々な対象に対して用いることで、そこでは対象物の甘受といった比喩的な理解に基づいた多義的意味認識も有する。これら本義的な意味認識と比喩的な意味認識の双方は、一見、無関係な意味構造に見え、前者と後者には意味的な関連性は何ら存在しないようにすら思われる。この問題に対して本稿では、認知意味論の視点から、live with～の二つの意味認識は双方とも何かしらの有契性によって成立する多義であると見なし、それゆえ、前者と後者の意味認識を結び付ける意味的な関連性が存在するという考えに立つ。そ

して多義について論じる際に、大きな問題となるのは、

- ①各語義の設定と記述、
- ②多義を生む中心的な認識の設定と記述、
- ③各語義の意味的連関性の分析、

の三点である。

本稿では、①の問題に対して、主に映画から採集した用例を基に、live with～の多義における各語義の設定を試みる。本稿での用例には主に映画の台詞を用いた。その理由は、多義の構造とその意味認識には、対話という単位とそれを助ける場面と文脈の要因が強く影響を及ぼすと考えるためである。また語や句の概念の抽出と分析は、実際の自然の言語資料を題材とし、そこに内在し共有される概念認識の分析によってこそ、有効なものとなるからである²⁾。そして②の問題に対してLangacker (1987^a, 1988^a, 1988^b) における「ネットワーク・モデル」³⁾ による多義認識の原理を適用し、③の各語義の意味的連関性にメトニミーが大きく関与していることを指摘する。それを基に、Langacker (1987^a, 1988^a, 1988^b) における「ネットワーク・モデル」の不備について指摘し、語の多義的意味認識の原理について認知的視点から明確化する。

また、多義認識の原理に「ネットワーク・モデル」を適用するという性質上、本稿では多義が中心的な共通認識からの派生関係によって形成されるという立場に立つ。それは、語の多義構造は中心となる何らかの概念の原核を基に、それが様々な対象に適用されることで概念の拡張を引き起こし、多義を形成すると考える認知意味論の視点と方向性を一にする。そして本稿では語の中心となる意味を便宜的に「中心的概念」と呼び表し、live with～の中心的概念と、それを基に形成される多義構造と多義的意味認識の原理について考察する。

2. 先行研究

2・1 多義の捉え方

多義が一から他が派生する意味認識の現象であるという点では、異論の余地はあるまい。ただし、その派生関係をどのように捉えるかという点で、諸説諸論によって異なりが見られる。ただし、鳥瞰的に見れば、多義に対するアプローチの性質は、次の二つに大別されよう。

一つは、一つの音韻形式が一つ以上の識別可能な意味を有するならば、それぞれの意味

は他の意味との関係とは無関係に個々に特徴付けられた存在であるという考え方である⁴⁾。この立場は、特にKempson (1977) における「不変の意味的価値 (constant semantic value)」⁵⁾という考え方に代表される。この立場に立つ者として、Jakobson (1936)、Leech (1974)、Kempson (1977)、Lyons (1977)、Searle (1983)、Bierwisch (1983)、Ruhl (1989)、Wunderlich (1991)、Bierwisch and Schreuder (1992) 等が挙げられる。

もう一つは、多義認識が一義的ないしは単義的な共通認識に還元され得るといったもので、往々にして認知的アプローチと呼ばれるものである。この立場を取る者として、Austin (1961)、Bolinger (1965)、Sampson (1980)、Haiman (1980)、Jackendoff (1983, 1990)、Geeraerts (1985)、Lakoff (1987)、Langacker (1987^a)、田中茂範 (1987, 1990)、Cruse (1986, 1990)、Brugman (1981, 1988)、Lindner (1983)、Norving and Lakoff (1987)、Lehre (1990)、国広哲弥 (1998) 等が挙げられる。そこでは、語の多義構造は、中心にプロトタイプとしての何らかの共通認識が存在し、それが周辺的に意味の拡張を引き起こし、メタファーやメトニミーといった認知原理によって多義を形成するという結果が得られている⁶⁾。本稿でも、多義認識に対して後者の立場を取る⁷⁾。

2・2 Langackerの「ネットワーク・モデル」

認知意味論では、多義について人間の認知構造からその多義の構図を解き明かそうとする。例えばLakoff (1987)、Taylor (1995) らは、多義を構成するネットワーク構造から多義構造の原理を説く。またそこではBrugman (1981, 1988) やLindner (1983) によるout、upの意味構造の研究、Lakoff (1987) によるoverの多義研究や、Norving and Lakoff (1987) によるtakeの語彙的ネットワーク関係の研究等が顕著である。

こうした中、特にLangacker (1987^a) の提案した「ネットワーク・モデル」という枠組みは、最も有効に語の多義性を説明付けることが可能な枠組みである。「ネットワーク・モデル」とは、意味認識が中心的なモデルから、徐々に周辺的なモデルへと派生、拡張が行なわれ、それが多義を形成するという考え方である。認知意味論で共通して取られる語の多義性に関する立場は、語の認識には成員間に成員としての帰属度の高低と、中心・周辺の別があり、カテゴリーには明確な境界線は存在しないというものである。「ネットワーク・モデル」の適用は、語の意味研究に対して、文中における語とそこで生成される語の多義性を有効に説明付ける。

しかしながら、こうした認知的視点によるlive with～の多義的意味認識についての研究

は未だ見られない。

2・3 辞書における意味記述

live with～の多義構造を見るため、まず既存の英々、英和辞典を用い、そこでの意味記述と語義設定がどのようなものであるか参照する。ここでは英々辞典にWEBSTER'S NEW WORLD COLLEGE DICTIONARY (MACMILLAN、1996年)を、英和辞典に『ランダムハウス英和大辞典 第2版』(小学館、1994年)を使用する。

WEBSTER'S NEW WORLD COLLEGE DICTIONARY

live with

- 1 to dwell with; be a lodger at the home of
- 2 to cohabit with
- 3 to tolerate; bear; endure [後 略]

『ランダムハウス英和大辞典 第2版』(以下、*RHD2 (J)* で表す)

live

- 5 (人と)一緒に暮らす、同居する、同棲(どうし)する《(together/with…)》; (…から離れて)住む《(away/from…)》: ~with one's grandparents 祖父母と一緒に暮らす、祖父母の家にいる。[中 略]
- live with*… (1) ⇨ v. i. 5. (2) <嫌な事を>受け入れる、…に甘んじる: I can ~with that. (《話》私の方はそれでもいいよ (▶相手の提案に対する答え)).

これらの記述から、live with～には人物を対象として取り、その対象人物との居住を意味する字義通りの意味認識と、おおよそあらゆるものを対象に取り、対象物と居住するという概念を基に対象物を受け入れる比喩的な意味認識の二つが存在することが分かる。そしてそこに共通の意味概念が存在し、それが多義構造を形成することが推測される。しかし、ここでの記述では、後者のような比喩的なlive with～の意味認識において、何を対象に取り、その対象に応じてどのように使用され得るかという点で、問題を残す記述となっているのは否めない。

2・4 多義的有契性の原理

昨今、多義的意味拡張の原理として殊に取り上げられるのが、メタファー、メトニミー

といった認知的枠組みである。語の多義的意味拡張において、中心→周辺という異なるモデル同士を結び付ける原理が、メタファー、メトニミーであることは、多くの場で指摘されている通りであり、ここでの説明を待たないが、メタファーやメトニミーが、語の多義的意味拡張に際してどのように作用するかについての、個別対象語を基にした具体的解明は未だ手付かずの状態であると言ってよい。またそれを証明するかのように、Langacker (1987^a, 1987^b, 1988^a, 1988^b) による多義の説明付けでは、メトニミーを多義認識の原理に位置付けてはいない。これは、意味の連鎖によるネットワークで多義構造を捉える際に、その端末部分である各語義の意味的連関性を説明付けるのに不備を生じさせる結果を生む。

更に、認知言語学の世界では、メタファーとメトニミーが語の多義性を形成するのに重要な役割を果たすことを認めながらも、その実、これらの枠組みについての定義や見解には、各人で揺れが見られることが多い。例えば Taylor (1989: 138) は、

“In some cases, at least, it seems that the possibility of transferring elements from one domain to another is established in virtue of the co-occurrence of the domains within a particular area of experience. Consider the conceptual metaphor *More Is Up*. As you add objects to a pile, the pile gets higher. This experience establishes a natural association between quantity and vertical extent. Strictly speaking, the association is one of metonymy. [少なくともいくつかの場合、一方の領域から他方の領域への移行の可能性は、ある特定の経験分野における領域の共起性によって成立するもののように思われる。例えば *More Is Up* (多いことは上である) という概念メタファーを考えてみるとよい。柱に物を積んでいくと、柱はどんどん高くなっていく。この経験は、量と高さの連想を自然に形づくる。率直に言って、連想は一種のメトニミーである。]” (拙訳)

と、メタファーを語の多義的意味認識に際する一番の要素として挙げながら、メトニミーには連想の一種としての立場しか与えてはいない。

一方、Heine, Claudi, and Hünemeyer (1991: 70) は、

“...a development from a lexical item to a grammatical marker might not be possible unless there is an intermediate stage whereby distinct conceptual domains [related by metaphor] are bridged by means of a metonymical understanding. [語彙的項目から文法的指標への発展は、メタファーによって関連づけられた明確な概念領域による中間的な段階を通して初めて、メトニミー的な理解によって橋渡しされるものである。]” (拙訳)

と述べて、メタファーがメトニミー的な橋渡しによってこそ成立すると指摘する。しかし Lakoff and Johnson (1980: 154-155) は、メトニミーについて何ら言及していない。

一方、杣山 (1997: 31/2001: 34) は、メタファーとメトニミーについて、次のように定義付けている。

メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。 —— 杣山 (1997: 31/2001: 34)

これまでの主張をまとめれば、「メタファー的拡張」とは、“類似性の認識に基づいて、一方を他方で理解しようとする認知プロセス”と定義付けることが出来、一方、「メトニミー的拡張」とは、“近接性の認識に基づいて、一方を他方で指し示そうとする認知プロセス”と定義付けることが出来よう。

本稿で言うメタファー、メトニミーとは、それぞれ「隠喩」、「換喩」に当るもので、この両者の関係は、語の多義的意味拡張の原理を有効に説明付けるための枠組みである。

3. live with～の使用例

今回の採集用例の記述では、*RHD2 (J)* における live with～の意味記述に従い、同辞典における (1)「～と一緒に住む」という概念での使用法を、本稿では“3・1 本義的な意味認識”とし、同辞典における (2)「〈嫌な事を〉受け入れる、…に甘んじる」という概念での使用法を“3・2 比喩的な意味認識”とする。そして“3・2 比喩的な意味認識”では、具体的にその対象を分類した。

3・1 本義的な意味認識

3・1・1 人物との同居

- (1) “Daniel is a very difficult man to *live with*.”

「ダニエルは一緒に暮らすとなると、とっても大変な人なのよ。」

*◇◇*映画『ミセス・ダウト』

- (2) “Tell me, dear, what was so horrible about this man you *lived with* for fourteen years?”

「ねえ、教えてくれない？14年間も一緒に暮らしてきた夫の何がそんなにひどかったの？」
*◇◇*映画『ミセス・ダウト』

- (3) “There are all sorts of different families, Katie. Some family have one mommy, some families have one daddy or two families. And some children *live with* their uncle or aunt. Some *live with* their grandparents and some children *live with* foster parents.”
「世の中には色々な家族があるのよ、ケイティちゃん。例えば、ママしかいない家族、パパしかいない家族、またはパパとママが二人ずつの家族もあるのよ。それにおじいさんやおばあさんと一緒に暮らしている子供もいれば、祖父母と一緒に暮らしている子供、里親と一緒に暮らしている子供だっているのよ。」
*◇◇*映画『ミセス・ダウト』

- (4) “I’m sorry.”
“Don’t apologize.”
“I kind of live with the assumption that all guys owe an apology to the woman they *live with*.”
「すまなかった。」
「何であなたが謝るのよ。」
「僕は、夫婦喧嘩の解決には、男の方から一緒に暮らす女に謝るべきだという説を支持しているからね。」
*◇◇*映画『ローズ家の戦争』

- (5) “Why have you never *lived with* your father?”
「なぜお父様と一緒に暮らさないの？」
*◇◇*映画『続・赤毛のアン』

- (6) “I suppose the penalty for being wealthy is that you have to *live with* the rich.”
「お金持ちであることの報いは金持ちと一緒に暮らさなきゃならないことね。」
*◇◇*映画『エバー・アフター』

- (7) “That’s a picture of me in Japan.”
“Who’s arm is that?”
“Uh, that’s the guy that I *lived with*.”
「それは私が日本にいた時の写真よ。」
「一緒に写ってる手はだれの？」
「一緒に住んでた男よ。」
*◇◇*映画『ジャッキー・ブラウン』

- (8) “I have a baby. I’ll bring her with me when I come to New York. I want to leave her with you.”

“A little girl? Where is she?”

“She’s across the Border in Alsace. She *lives with* a baker’s family.”

「私には女の赤ちゃんがいるのよ。一緒にニューヨークに連れていくわ。あなたに預けたいからね。」

「まあ、女の赤ちゃんが？それでその子は今どこにいるの？」

「アルザスの国境付近よ。そこのパン屋さん一家に預けてあるの。」

*◇◇*映画『ジュリア』

- (9) “It seems so wonderful that I’m gonna *live with* you and belong to you. I’ve never really belonged to anyone before.”

「あなたの所に置いていただけるなんて本当によかったわ。私は今までずっと一人ぼっちだったから。」

*◇◇*映画『赤毛のアン』

- (10) “How did you get so tough?”

“I *live with* a fighter.”

「どうしてそんなに気丈になったんだ？」

「だってボクサーの妻ですもの。」

*◇◇*映画『ロッキー 3』

3・2 比喩的な意味認識

3・2・1 心的状態

- (11) “A lot of people *live with* hurt.”

「誰しも心に痛みを抱いてるわ。」

*◇◇*映画『ロッキー 4』

3・2・2 事態

- (12) “God, I hate the country.”

“Yeah, I can see how you’d be real miserable here.”

“Who can *live with* so many trees?”

「本当に嫌ね、田舎って。」

「実に淋しいところでしょう。」

「こんな鬱蒼とした森の中で我慢できる人なんていると思う？」

*◇◇*映画『摩天楼はバラ色に』

- (13) “He would’ve bought it, Helen. I’m telling you, maybe not today, maybe not next year, but it would’ve happened. All right? I mean, he’s my brother. I couldn’t just…”

"You just couldn't *live with* that?"

「いいか、奴はこの間も火事の現場で死にそうになったんだ。この調子で行けば、今日じゃないとしても、また来年でもないとしても、いつかきっと火事の犠牲になる。消防士である前に奴は俺の弟なんだ。そんなこととてもじゃないが…」

「耐えられないってわけね？」

*◇◇*映画『バックドラフト』

- (14) "Have you any idea what it's like to *live with* all this? People look at us and only see bigots and racists. "

「こんな所でじっと耐える気持ちがあなたに分かるの？変り者の人種差別主義者と周りには後ろ指を指されながらよ。」

*◇◇*映画『ミシシッピー・バーニング』

- (15) "Things have changed. And we've got to *live with* these changes. "

「今は時代が違うんだから。自分の方が時代に合わせなきゃ。」

*◇◇*松本道弘著『考える英語』p. 63.

- (16) "The pendulum swings wide, and when it does, you develop an ability to *live with* these changes. "

「時代が変われば、それなりに時代の潮流に順応できるような能力が自然に身につくものだ。」

*◇◇*松本道弘著『考える英語』p. 64.

- (17) "If that's the way it is, you've got to *live with* it. "

「それが現状なら、あきらめなさい。」

*◇◇*松本道弘著『入門英語道場』p. 99.

- (18) "You've got to *live with* inflation. "

「インフレとはこんなもんだ、しかたがない。」

*◇◇*松本道弘著『考える英語』p. 18.

- (19) "I look back on the way I was then, a young stupid kid who committed that terrible crime. I want to talk to him. I want to try to talk some sense to him. Tell him the way things are. But I can't. That kid long gone, and this old man is all that's left. I gotta *live with* that. "

「わしはあの時の自分を振り返ることがある。あの忌わしい罪を犯した、若くて愚かなガキ。あの時の自分と話がしたい。分別を教えてやりたい。世の道理を説いてやりたいんだ。しかしそれは出来ない。あの時のガキはどうにいなくなって、残されたのはこの老いさらばえた肉体だけじゃよ。その現実を受け入れるしかわしには出来ないんじゃ。」

*◇◇*映画『ショーシャンクの空に』

3・2・3 決定・結果

(20) "I'm sorry. This is my fault."

"Don't apologize, for God's sake. I mean, just tell me what I did. I'm a big girl."

"You didn't do anything. It was me. I got involved with my client."

"Your client? So you're not attracted to your client anymore?"

"Oh, Christ, I told you why. I can't protect you like this."

"So that's it for me? That's it?"

"Yeah."

"Well, I don't believe it!"

"Well, you can *live with* it or you can fire me."

「すまない。俺の過ちだ。」

「何で謝るのよ。私、何か気に障ることをした？」

「いや、君に責任はない。俺の責任だ。ボディーガードの俺が依頼人の君と肉体関係に堕ちてしまうなんて。」

「依頼人ですって？じゃあ、依頼人にはもう心を動かされないってこと？」

「ああ。理由は話したろ？こんな風に私情をはさんでは君を守ることなんて出来ない。」

「じゃあ、これっきりってこと？あたしたちの関係はもうおしまいなの？」

「そうだ。」

「そんなの嫌よ。」

「それに甘んずるか、それが出来なきゃ俺を餌にするかのどっちかな。」

*◇◇*映画【ボディーガード】

(21) "What do you figure the breakage?"

"I figure we take out the terrorists lose twenty, twenty-five percent of the hostages, tops."

"I can *live with* that."

「今度のテロ事件で死者は何人ぐらい出ると思う？」

「テロリスト全員と、人質は最悪で20か25パーセントぐらいかな。」

「それぐらいはやむを得ない（仕方がない）な。」

*◇◇*映画【ダイ・ハード】

(22) "Look, Stallion. Now look, when you won that past fight, you won by one second. You beat me by one second, one second. That's very hard for a man of my intelligence to handle."

"Oh, is it? But didn't you say, after I beat you, you learned how to *live with* it?"

"I lied."

「いいかロッキー、以前の試合でお前は俺をあっという間にのしちまった。一瞬で俺を倒したんだ。だが俺みたいなインテリにはそれが今だに納得いかねえんだ。」

「そうか？あの時は試合の結果は気にして（苦にして）いないと言ったじゃねえか。」

「ありゃウソだ。」

* ◇ ◇ * 映画『ロッキー 3』

- (23) “Look, man, when you beat me, I hurt all over and I didn’t wanna know from nothing or nobody. Not even my kids. The hell, every fighter knows that hurt. And we got sick inside, trying to *live with it*.”

「俺もお前に負けた時は、ズタズタに傷ついて誰からも何も言われなくなかった。自分の子供からもな。ボクサーはみんなそういう辛い思いをするんだ。そして信じたくない自分の敗北を受け止め（受け入れ／認め）ようとして苦しむんだ。」

* ◇ ◇ * 映画『ロッキー 3』

- (24) “I want this child. It has nothing to do with you. I want it whether you’re going to be a part of it or not.”

“This is insane. Insane. It’s totally insane.”

“I’m thirty-six years old. It may be my last chance to have a child.”

“Ah, Alex, just, just think what you’re saying. Just think about it. We are going to *live with this* for the rest of our lives.”

「私、お腹の赤ちゃんを産みたいの。あなたには迷惑かけないから。あなたがこの子の父親になろうがなるまいが構わないから。」

「そんなの正気の沙汰じゃない。バカげてるよ。全くバカな話だ。」

「私、今年で36歳よ。これを逃がしたら、もう二度と子供を産むチャンスなんてないかもしれないのよ。」

「なあ、アレックス、冷静に考えてごらん。子供なんて産んだら、俺達の残りの人生をその責任を取ることに使わなきゃならなくなるんだよ。」 * ◇ ◇ * 映画『危険な情事』

- (25) “You took him away from Jeremy. Now you stand here, you stand here and you just *live with that*.”

「ジェレミーから夫を寝取ったことを一生後悔すればいいんだわ。」

* ◇ ◇ * 映画『交渉人』

- (26) “I was involved with a human rights group in London. We bombed a building owned by the Chinese government. It was supposed to be empty, and it wasn’t. And I have to *live with that*.”

「私は、ロンドンで人権保護団体の仕事をしていたの。そこで、中国政府の所有しているビルを爆破したわ。そのビルには人は誰もいないはずだったけど、でもそうじゃなかった。だから私は自分が犯した罪から一生逃れられないの。」

* ◇ ◇ * 映画『スパイ・ゲーム』

3・2・4 提案・申し出

(27) “I’ll just have to find it in my heart to *live with* your offer.”

「あなたの申し出は心の底から受けましょう。」

* ◇ ◇ * 映画『ツインズ』

3・2・5 発言・言質

(28) “Do you want to elaborate on the verification clause?”

“Verification. Uhm, that means you pay even if the relationship isn’t consummated.”

“You mean if I’m impotent.”

“It’s important for a lawyer to cover contingencies.”

“I can *live with* that. The John Garfield clause?”

“Ah, that’s if you died in the act.”

“I have no problem with that, either.”

「確認条項について詳しく話してくれないかな？」

「確認条項。すなわち、彼女との間に男女の肉体関係が成立しなくてもあなたの方に金銭の支払い義務があるということです。」

「仮に私が性的に不能であったとしても、ということだね。」

「不測の事態を考慮しておくことは、弁護士にとって重要なことですから。」

「その点については、まあよしとしよう。ところで、このジョン・ガーフィールド条項というのは何だ？」

「ああそれですか。それはもし女性との性行為の最中にあなたが死亡した場合のことです。」

「その点についても問題はない。」

* ◇ ◇ * 映画『幸福の条件』

3・2・6 理念・思想

(29) “I’m sorry.”

“Don’t apologize.”

“I kind of *live with* the assumption that all guys owe an apology to the woman they live with.”

「すまなかった。」

「何であなたが謝るのよ。」

「僕は、夫婦喧嘩の解決には、男の方から一緒に暮らす女に謝るべきだという説を支持
しているからね。」

*◇◇*映画『ローズ家の戦争』

3・2・7 仮説・予想

(30) “Your lady sees you, you run into each other's arms, the music comes up, and you live happily ever after, right?”

“I can live with that.”

「奥さんは夫であるあなたをじっと見つめ、二人は抱き合い、そこに音楽が流れる。その後はいいムードになっていくんでしょう？」

「そういきたいもんだね。」

*◇◇*映画『ダイ・ハード』

4. 分析

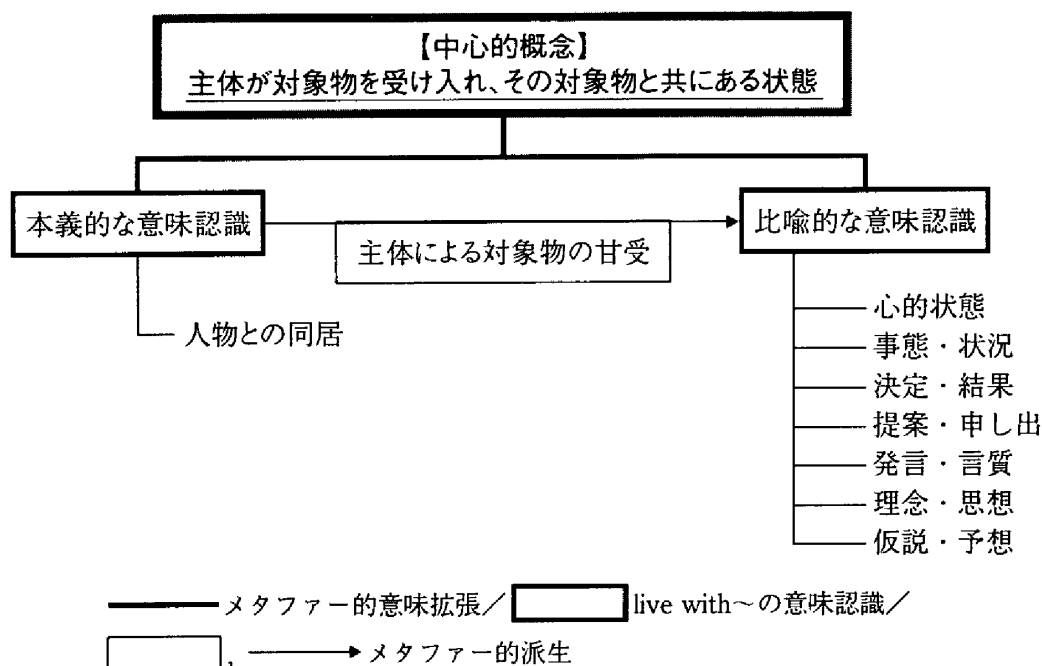
4・1 live with～の多義構造

以上、live with～は、本義的な意味認識と比喩的な意味認識があり、本義的な意味認識の際には人物を対象に取り、その場合には、対象となる人物との同居を表す。一方、比喩的な意味認識には、その対象に「心的状態」、「事態・状況」、「決定・結果」、「提案・申し出」、「発言・言質」、「理念・思想」、「仮説・予想」を取ることを明らかにした。これらの用例と、そこでの対象全てに共通するlive with～の中心的概念は、「主体が対象物を受け入れ、その対象物と共にある状態」と記述することが出来る。そしてそれが比喩的に様々な対象物を取る場合には、その対象物が主体にとって受け入れ難いものであるというニュアンスを余剰的に持つ。そしてそこから、「受け入れ難い対象物を主体が甘受する」という概念を形成し、否定的な使用法へとつながっていく。それは、比喩的な意味認識のlive with～が、全て否定的事実と共に用いられるという先の用例からも見て取ることが出来る。

こうしたlive with～の中心的概念とその多義構造を図示すると、図1のようになる。

live with～の多義認識には、中心に「主体が対象物を受け入れ、その対象物と共にある状態」という中心的概念があり、この認識が人物との同居に対して用いられた際には、文字通りの本義的な認識しか生まない。一方で、中心的概念がメタファー的に派生して、「心的状態」、「事態・状況」、「決定・結果」、「提案・申し出」、「発言・言質」、「理念・思想」、「仮説・予想」を対象にすることで、それぞれの対象に応じた意味認識が生じ、結果、

図1 live with ～の多義構造



それがlive with～の多義を形成する。

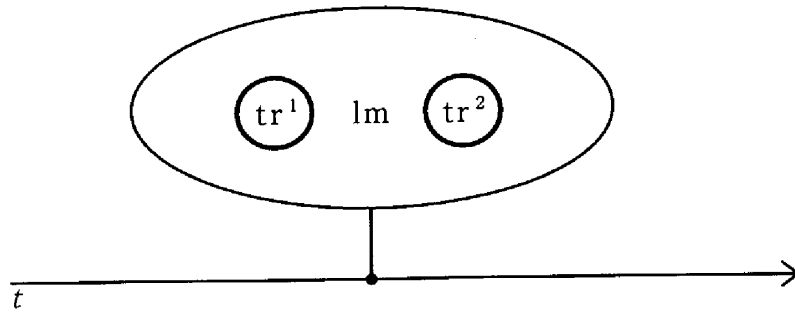
しかしながら、Langacker (1987^a, 1988^a, 1988^b) の「ネットワーク・モデル」では、今回見たような、各語義の派生関係とその実際についても、十分検討されているとはいえない。このことは、意味の連鎖によるネットワークで多義構造を捉える際に、その端末部分である各語義の意味的連関性を説明付けるのに不備を生じさせる結果を生む。そのため、Langacker の「ネットワーク・モデル」は、今回図1で示したような、多義語の各語義の派生、連関関係を十分に捉えきれないままに終わっている。そのため、先の用例文における意味認識の曖昧さと、多義的意味認識の境界を有効に説明付けることが不可能である。しかしながら、今回のように、多義の各語義を中心的な共通認識からのメタファー的派生として捉え、各語義それぞれを互いの性質や機能といった重なり合う成員のメタファー的拡張と捉えれば、語の多義的意味派生の関係と、それを基に行われる多義的意味認識の原理が有効に説明付けられる。

4・2 live with～の概念認識図

そして、live with～のこうした多義を支える中心的概念の概念認識の構造を図示すれば、図2のようになる。

これは、背景的空間 lm において、対象となる tr^1 と tr^2 が共に並存している状態を表し

図2 live with ~の概念認識図



ている。lmが居住空間を表し、tr¹とtr²が対象人物を表せば、本義的な認識となる。一方、lmが主体のメンタル・スペースを表し、tr¹が主体自身を、tr²が主体に向けられた発言や事態として捉えれば、主体がそうした対象物と供にあるろいう認識となり、それがイメージ・スキーマ的に“心的状態”、“事態・状況”、“決定・結果”、“提案・申し出”、“発言・言質”、“理念・思想”、“仮説・予想”に対して転用されることで、live with ~の多義が形成される。

またこのことは、意味認識を人間主体の視点から、主体を中心に据えた世界の認知との関連で様々な意味付けがなされんとする認知言語学の考え方⁸⁾をも、有効に実証するものである。というのもlive with ~の本義的な意味認識とは、主体が生物と生活空間を共にするということであるから、最初に他人との同居という概念認識があり、それが比喩的に拡張することで、生物以外の様々な対象にまでこの概念認識が適用され、多義を形成する現実が、今回の用例とその概念認識の分析により、不動の事実として証明されたからである。

5. おわりに

live with ~は、主に口語での使用において、一方で人物を対象に取り、「対象人物と一緒に暮らす」という文字通りの意味認識を形成しながら、もう一方でその概念を基に、人物以外の幅広い対象物に対して比喩的な意味認識を生む。そしてこの二つの意味認識を貫くlive with ~の中心的概念は「主体が対象物を受け入れ、その対象物と共にある状態」と記述出来ることを提言した。この中心的概念を基にして、「主体による対象物の甘受」といった概念が形成される。そしてそれが様々な対象を取ることで、この中心的概念がメタファー的に拡張することによって、多義が形成されるという原理が見られる。またそれぞれの各語義の派生関係をメタファー的拡張として捉えることは、Langacker (1987^a, 1988^a, 1988^b) で提示された「ネットワーク・モデル」の不備を補完し、語の多義的な意味認識の

原理を有効に説明付けるものであることを実証した。

*本稿は、松中（1998）での研究発表を基に、用例の追加、理論の改訂など、大幅な加筆・訂正を施したものである。なお、加筆・訂正にあたっては、敬愛大学経済文化研究所より2005年度個人研究（「live with～の意味認識と多義的使用の認知原理の解明」）の助成を受けた。

注

- 1) このことについては、松中（2001^b, 2001^a, 2001^c, 2002^a, 2002^d, 2003^a, 2003^b, 2003^c, 2004^a, 2004^b, 2005^b, 2005^e, 2005^f, 2006）で詳しく各々の語を対象に実証しているので、そちらを参照のこと。
- 2) 一方で、用例にコーパス使用の有用性を指摘する声もあるが、このことは意味研究の本質を分かっていない指摘であると言える。確かにコーパスの利便性は大きい。しかしながら、コーパスは統計的な連語上の情報を見るには適切であるが、中心から周辺へと拡張することで形成される多義的意味認識の原理を見るには不備が多いのも事実である。多義的意味認識における意味認識の根底にある認知機構は、中心から周辺へといたる拡張の中で、むしろ周辺に目を向けることで見えてくる部分が多い。このことは松中（2002^e）で述べた通りである。しかしコーパスは頻度によって意味の集合を列挙するため、中心にある用法と意味認識に偏る傾向が払拭できない。その点で、コーパスの価値は意味研究においてはglossary的なものでしかない。これはそのまま、本文中における研究目標であげた①、②、③の三つの問題点の解決に何ら寄与しないことを意味している。このことは、同じ多義現象を扱いながらも、多義的使用のコロケーション上の統計資料としての位置付けがなされるコーパス言語学と、多義的使用の根底にある人間の認知原理の解明という位置付けがなされる認知言語学という棲み分けがなされる現状を見ても明らかである。また映画における台詞を用例として用いること自体が、これまでの言語学における意味研究のあり方に対する新たな挑戦と本論文の独創性でもあるが、この点については、松中（2003^e）で具体的に論じているので、更に詳しくはそちらを参照のこと。ただし今後は、意味研究において認知言語学における内的原理の探究の方向性と、コーパス言語学における外的言語情報の分析の方向性という二つの側面の生産的な融合を目指すべきであろう。
- 3) Langacker（1987^a）では、正確には“schematic-network model”という術語が用いられているが、本稿では簡略に「ネットワーク・モデル（network model）」として表すことにする。

- 4) 構造主義的な立場に立てば、語の意味は、意義素と呼ばれる有限個の意味要素の組み合わせによって記述することが可能であるという前提に立ち、用例の背後にある最大公約数的な意味を意義素の束として取り出し、分析することに研究の主眼が置かれる。一方、認知言語学の立場に立てば、語の最大公約数的な意味を取り出し、それを意義素の束で記述することは有効でないとし、多義を構成する語義間の関係を“動機付けられた関係のネットワーク”として捉え、語義間の関係を図式の連鎖図で捉えようとする点にその特色がある。Taylor (1995 : 83-84) も指摘するように、構造主義言語学と認知言語学は、言語形式には他からの影響を受けることなく現実の事物の意味があるという考えを否定し、意味は文脈に依存すると考える点で意見の一致を見るが、構造主義言語学における文脈とは言語体系内における記号間の統合的、系列的な関係を意味する。一方認知言語学における文脈とは言語体系の外にあるものである。その点で、両者のアプローチは対照的なものとなる。本稿での論証は、構造主義言語学で取られたような、用例の背後に最大公約数的な共通の意味認識を「中心的概念」という形で認め、それを基に認知的な手法で語義間の意味の連関性を明らかにすることを目指し、構造主義や認知主義といった学問の枠組みを超えた、一種、普遍的な意味分析の方法論のあり方を探るものである。
- 5) しかしながら、この考えに対しては、次の二点で大きな批判を免れ得ない。第一にこの立場では、多義性を犠牲にして同音異義を広義に解釈するため、個々別々の意味の各々に不変の意味的価値が付与される可能性を除外してしまう。第二に先の結果から、語の多義性は恣意的で動機付けや有契性のない現象ということになり、その研究法は理論的にも記述的にもアプローチの難しいものになってしまう。同時にそれは、この立場に立って多義を扱うことの大きな欠点を露呈している。
- 6) カテゴリーの背後にある知識構造は、構造主義で取られたような、典型性条件を列挙するだけでは見えて来ない。しかしながら、人間が事物を捉える際に前提として用いる推論過程モデルを明示し、そこでのモデルと実際の事例とを照らし合わせることで、多義の意味的有契性が明かとなる。そうした意味の有契性の関係は、中心的なモデルによって特徴付けられるカテゴリーの成員と、そこから幾分かずれたカテゴリーの成員のモデルによって特徴付けられる非中心的なカテゴリーの集合体が、放射状に連関した構造体をなすことで形成される。「ネットワーク・モデル」は、中心的な成員を規定するモデルと、それとは異なる特徴を持つ様々な成員を規定するモデルとが互いに関連しあうことで、意味認識の多義性が生まれると考えるものである。そしてこうした中心的なモデルから非中心的なモデルへと認識が広がって行くことを、「拡張 (extension)」と呼ぶ。こうした中心→周辺という異なるモデル同士を結び付ける原理が、メタファー (隠喩)、メトニミー (換喩) である。

- 7) ただし Cruse (1986: 52-53) は、メトニミーによる意味拡張を多義的であるとは見なさず、語の異なる側面が“文脈に調整されたもの (contextual modulation)”に過ぎないという見解を示している。しかしながら、語彙の中には、単一概念構造の構成要素を前景化することによって生じるメタファー、メトニミー的拡張という現象が多く見られる。本稿で扱う live with～ の広範な意味拡張もまさにその例にもれない。このことは、文脈的調整は多義性の種を含んだものとして考える方が妥当であることを示している。
- 8) 認知言語学のこうした方向性については、山梨正明 (2000: 4) の、
- “認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は、ミクロ・レベルからマクロ・レベルにいたるどのような要素であれ、認知主体が外部世界とインターアクトし、外部世界を解釈していくダイナミックな認知プロセスの反映として規定される。外部世界の対象や事態は、認知主体としてのわれわれから独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点との関連でさまざまな意味づけがなされる。また、このアプローチでは、言葉の世界には、人間の知性的な側面だけでなく、五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験が反映されているという立場をとる。”
- という説明にも、その性質を見ることが出来る。

参考文献

- Austin, J.L. 1961. *Philosophical Papers*. Oxford: Clarendon Press.
- Bierwisch, M. 1983. Semantische und konzeptuelle Repräsentation lexikalischer Einheiten. R.Rüzicka and W.Motsch ed. 1983. *Untersuchungen zur Semantik*. pp.61-99. Berlin: Akademie-Verlag.
- Bierwisch, M. and Schreuder, R. 1992. From concepts to lexical items. In *Cognition* 42-1-3, pp.23-60. The Netherlands: Elsevier science publishers.
- Bolinger, D. 1965. The atomization of meaning. In *Language* 41-4, pp.555-573. Baltimore: Waverly Press, Inc.
- Brown, L. 1993. *The New Shorter Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- Brugman, C. 1981. *Story of Over*, M.A.Thesis, Berkeley: The University of California.
- Brugman, C. 1988. *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. New York: Garland Publishing.
- Cruse, D.A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Cruse, D.A. 1990. Prototype theory and lexical semantics. In Tsohatzidis ed. 1990. *Meanings and Prototypes*. pp.382-402. London: Routledge.
- Dirven, R. et al. 1982. *The Scene of Linguistic Action and its Perspectivization by Speak, Talk, Say, and Tell*. Amsterdam: John Benjamins.
- Geeraerts, D. 1985. Cognitive restrictions on the structure of semantic change. In J. Fisiak ed. 1985. *Historical Semantics*. pp.127-153. Berlin, New York: Mouton

Publishers.

- Haiman, J. 1980. Dictionaries and encyclopaedias. In *Lingua* 50-4, pp.329-357. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Heine, B. and Claudi, U. and Hünemeyer, F. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Jackendoff, R. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jakobson, R. 1936. Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutungen der russischen Kasus. In *Selected Writings ii*, pp.23-71. The Hague: Mouton.
- Kempson, R. 1977. *Semantic Theory*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』三省堂.
- 国広哲弥. 1970. 『意味の諸相』三省堂.
- 国広哲弥. 1998. 「英語多義語の認知意味論的分析」『神奈川大学創立七〇周年記念論文集』pp. 265-284. 神奈川大学創立七〇周年記念論文集編集発行実行委員会.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦／河上誓作他訳. 1993. 『認知意味論』紀伊國屋書店.)
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一／楠瀬淳三／下谷和幸訳. 1986. 『レトリックと人生』大修館書店.)
- Langacker, R.W. 1987^a. *Foundations of Cognitive Grammar. vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R.W. 1987^b. Nouns and Verbs. In *Language* 63, pp.53-94. Baltimore: Waverly Press, Inc.
- Langacker, R.W. 1988^a. A View of Linguistic Semantics. In Brygida Rudzka-Ostyn ed. 1988. *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R.W. 1988^b. A Usage-Based Model. In Brygida Rudzka-Ostyn ed. 1988. *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R.W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R.W. 1995. Raising and Transparency. In *Language* 71-1, pp.1-62. Baltimore: Waverly Press, Inc.
- Leech, G. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lehre, A. 1990. Prototype theory and its implications for lexical analysis. In Tsohatzidis ed. 1990. *Meanings and Prototypes*. pp.368-381. London: Routledge.
- Lindner, J. 1983. *A lexico-semantic analysis of English verb particle constructions with out and up*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Lyons, J. 1977. *Semantics vol.1/vol.2*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Miller, G. 1978. Semantic relations among words. In Halle, M., Bresnan, B. and Miller, G. eds. 1978. *Linguistic theory and psychological reality*. pp.60-118. Cambridge, Mass: MIT Press.

- 松中完二. 1998. 「live with～の意味概念とその使用法について」『英語語法文法学会 第6回大会 語法ワークショップ』研究発表資料.
- 松中完二. 2000^a. 「意味現象の捉え方ー先行研究の紹介と整理ー」『ICU比較文化』第32号、pp. 47-74. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2000^b. 「edgeの概念構造と多義的意味認識についてー認知的視点からー」『英語語法文法研究』第7号、pp.135-150. 英語語法文法学会.
- 松中完二. 2001^a. 「throughの概念構造についての認知意味論的考察ーその多義構造とメタファーの意味認識についてー」『JELS』第18号、pp.121-130. 日本英語学会.
- 松中完二. 2001^b. 「構造主義言語学における意味研究の黎明」『ICU比較文化』第33号、pp.65-100. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2001^c. 「forgetの概念認識と多義的使用についてー認知的視点からー」『英語表現研究』第18号、pp.10-18. 日本英語表現学会.
- 松中完二. 2002^a. 「developの原義と多義的意味派生についてー原義の設定と多義的有契性についての認知的分析ー」『JELS』第19号、pp.206-215. 日本英語学会.
- 松中完二. 2002^b. 「現代の多義語の構造」飛田良文・佐藤武義共編『現代日本語講座 第4巻 語彙』pp.129-151. 明治書院.
- 松中完二. 2002^c. 「認知言語学における意味研究の黎明」『ICU比較文化』第34号、pp. 123-155. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2002^d. 「gameの概念カテゴリーと多義性についての認知的考察」『日本認知言語学会論文集』第2巻、pp. 23-33. 日本認知言語学会.
- 松中完二. 2003^a. 「英和辞書の意味記述と訳語の隙間ーgoodの訳例に見る意味認識と訳語生成の創造的側面についてー」『ICU比較文化』第35号、pp.127-145. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2003^b. 「businessの多義的意味認識についてー多義の意味的有契性に対する認知的考察ー」『経済文化研究所 紀要』第8号、pp.21-58. 敬愛大学経済文化研究所.
- 松中完二. 2003^c. 「現代英語語彙の多義構造ー認知論的視点からー」国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士学位論文.
- 松中完二. 2003^d. 「翻訳における意味認識と訳語生成についての認知論的考察」『敬愛大学研究論集』第64号、pp.77-95. 敬愛大学経済学会.
- 松中完二. 2003^e. 「言語資料としての用例文の性質とあり方について」『敬愛大学 研究論集』第65号、pp.111-138. 敬愛大学経済学会.
- 松中完二. 2004^a. 「語の多義的意味拡張についての認知的考察ー「山」の場合を基にー」『日本語教育学の視点』pp.380-394. 東京堂出版.
- 松中完二. 2004^b. 「「甘い」と“sweet”の意味拡張についての認知的考察ー共感覚表現の身体性からー」『telos』第37号、pp.17-63. 金沢星稜大学人間科学研究所.
- 松中完二. 2004^c. 「意味認識の原理についての認知的考察ー「場面」と「文脈」の観点からー」『敬愛大学 研究論集』第66号、pp.51-98. 敬愛大学経済学会.
- 松中完二. 2005^a. 「言語表現と意味認識についてー認知論的視点からー」『敬愛大学 研究論集』第67号、pp.129-158. 敬愛大学経済学会.
- 松中完二. 2005^b. 「現代英語語彙の多義構造ー認知論的視点からー【理論編】」白桃書房.
- 松中完二. 2005^c. 「「D-E理論」と翻訳における意味の等価性についてー芭蕉の「古池」の

- 英訳を基に－』『アジア文化研究』第31号、pp.141-155. 国際基督教大学アジア文化研究所.
- 松中完二. 2005^d.『言語と文化－日英語に見る発想と表現の相違－』『経済文化研究所 紀要』第10号、pp.49-74. 敬愛大学経済文化研究所.
- 松中完二. 2005^e.「thing(s)の意味認識について」『日本認知言語学会論文集』第5巻、pp.375-385. 日本認知言語学会.
- 松中完二. 2005^f.「take care of ～ の多義認識についての認知的考察」『英語語法文法学会 第13回大会予稿集』pp.22-26. 英語語法文法学会.
- 松中完二. 2006.『現代英語語彙の多義構造－認知論的視点から－【実証編】』白桃書房.
- Miller,G. 1978. Semantic relations among words. In Halle,M., Bresnan,B. and Miller,G. eds. 1978. *Linguistic theory and psychological reality*. pp.60-118. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 舩山洋介. 1997.「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に－」『名古屋大学国語国文学』第80号、pp.29-43. 名古屋大学国語国文学会.
- 舩山洋介. 2001.「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明編. 2001.『認知言語学論考』No.1、pp.29-58. ひつじ書房.
- Norving,P. and Lakoff,G. 1987. Taking: A Study in Lexical Network Theory. In *BLS 13* pp.195-206. Berkeley: Berkeley Linguistic Society, Inc.
- Palermo,D. 1982. Theoretical issues in semantic development. In Kuczaj,S. ed. 1982. *Language development 1: syntax and semantics*. pp.335-364. Hillsdale, NJ: Lawrence Earlbaum Associates.
- Rosche,E. 1973. On the internal structure of perceptual and semantic categories. In Moore,T. ed. 1973. *Cognitive development and the acquisition of language*. pp.111-144. New York: Academic Press.
- Ruhl,C. 1989. *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. Albany: State University of New York Press.
- Sampson,G. 1980. *Making Sense*. London, New York: Oxford University Press.
- Searle,J. 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 瀬戸賢一. 1997.「拡大するメトニミー－認知言語学の問題点－」*PROCEEDINGS OF THE TWENTY-FIRST ANNUAL MEETING*. pp.67-77. 関西言語学会.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典 第2版編集委員会編. 1994.『ランダムハウス英和大辞典 第2版』小学館.
- 田中茂範. 1987.『基本動詞の意味論 コアとプロトタイプ』三友社.
- 田中茂範. 1990.『認知意味論 英語動詞の多義の構造』三友社.
- Taylor,J. 1989¹ (1995²). *Linguistic Categorization 2nd ed*. London, New York: Oxford University Press. (辻 幸夫訳. 1996.『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店.)
- Ullmann,S. 1951^a. *Words and their Use*. London: Muller.
- Ullmann,S. 1951^b. *The principles of Semantics*. Glasgow: Jackson.
- Ullmann,S. 1962. *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell & Mott Ltd.

- Wunderlich,D. 1991. How do prepositional phrases fit into compositional syntax and semantics? In *Linguistics* 29-4, pp.591-621. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版.
- Zipf,G. K. 1949. *Human behavior and the principle of least effort*. Cambridge: Addison-Wesley.